

平成二十三年度 中学校入学試験問題 国語

❖ 字数制限がある問題は、「、」や「。」も一字と数えます。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

満員電車で、乗客たちの行動を見て気がついたことがある。それは、このおびただしい数の、押しつぶされた人間たちが、例外なしに無表情で、しかも無言だ、という事実である。みんな、むつつりと黙って、つまらなそうな顔をしている。もとより、満員電車に乗っているということは、あんまり愉快な経験であろうはずがなく、この何千何万の通勤者たちが、イワシのカン詰めのごとくにつぶされ、なおかつ、ニコニコおしゃべりしているとするとするなら、それこそ不気味というべきであろう。無表情、無言、ということこそ、こうした場合の人間性なのである。

だが、その無表情、無言も程度問題だ、とわたしは思う。とりわけ、満員電車から降りるときに、無言で人を押しのけ、ドアに向かって移動する人々にぶつかると、なんとなく、変な気持ちになる。それは、あたかも人間のかたまりのまん中を貫通して、巨大なモグラが動いているような感じなのだ。押しのけるほうも、押しのけられるほうも、ひたすら無言。それがわたしには不思議なのである。

同じようなことを、わたしは、例えばデパートのエレベーターなどでも経験する。ある階で止まると、突然に、奥のほうから無言のモグラが動いてくる。突然だから、こっちもびつくりする。いずれにせよ、あんまり、いい気持ちのものではない。ちよつとひと言、声をかけてくれればいいのに、と思う。「降りますよ」「ごめんなさい」——そういう簡単なひと言がかけられれば、こっちもそれを一つの準備刺激として、通過する空間を作るべく努力できるはずである。そして、「どうぞ」という反応の言葉も、おのずから出てこようというものだ。黙って、やたらに背中を押されていたのでは、何が何やらわからず、不愉快な思いをせざるをえない。

a、このモグラ人間の中には、しばしば、押し分け、かき分けながら、周りの人間たちを一種の敵意と憎悪に満ちた眼差しでにらみつける連中がいる。あたかも、自分が脱出のため「I」「I」しているのは、周りの人間たちがいけなからだ、といったような表情がそこにはある。そういう表情でにらまされると、こっちも腹が立ち、出してやるものか、といった気持ちがかすめる。

b、ゆずり合うというよりも、押し合う姿勢をとらざるをえなくなり、満員の電車やエレベーターは、ますます不愉快な経験となる。

さまざまなサービスの場面でも、われわれは、おしなべて沈黙民族だ。例えば喫茶店で飲む一杯のコーヒーがそうだ。ウェイトレスが注文をとりにくる。われわれの多くは、ただ「コーヒー」とひと言事務的につぶやく。彼女は、やがて無言のままコーヒーと伝票を、これまた事務的にポンとテーブルの上に置き、お客のほうも、黙々とコーヒーを飲み、金を払って帰ってゆく。これもまた、どうにかならないか、とわたしは思う。

こんなことを言うのも、ひょつとすると、わたし自身がアメリカやヨーロッパで暮らしたり、滞在したりした時の経験が背景にあるからなのかもしれない。同じ一杯のコーヒーでも、欧米、とりわけアメリカの社会では、だいたい様子がちがうのである。

c、アメリカでコーヒー・ショップに入る。ウェイトレスはメニューを持って「おはようございます。ご機嫌いかが?」と、まずこうくる。こっちのほうは、それに答えて、「ありがとう、まあまあだね、ところで……」と、とにかく、何かものを言わざるをえないしかけになっているのである。そして、そういう、行きずりの人間関係のウォーミング・アップののちに、コーヒーが運ばれてくるわけで、したがって、彼女のほうは、「お待たせしました。さあどうぞ」ということになり、こちらとしても、「ありがとう」という言葉が自然に出てくるものなのだ。

もとより、こんなふうにして交わされる二言三言の会話に実用的意味があるか、といえは、答えは否である。別にお天気が

よかろうと悪かろうと、あるいは当方の機嫌がどうであろうと、そんなことは実のところ、問題ではない。d、この種の「会話」は、言葉の「意味」に照らして考えてみたら、全く無意味という以外に言いようはないのである。しかし、この無意味なる会話のあるなしによって、人間どうしのかかわり合いの形は、ずいぶん異なったものになる。早い話、ぶすつと押し黙ったウェイトレスがガチャリとテーブルの上に置いてゆくコーヒーと、にっこりほえんで「さあどうぞ」と置かれるコーヒーと、どっちがあなたにとっておいしいか。

日本文化が沈黙によって支配されているのは、いったいなぜか——これは歴史的にも社会的にも、きわめて興味ある問題である。^{〔注2〕}柳田国男先生がその著作の中でくり返し指摘されたように、日本の民衆生活の中で、おしゃべりというものがマイナスの価値をもち、ただ黙々と働くことが美德とされてきたこと、そして、さらに、そんなわけで「もの言うすべ」を身につける機会を日本人の多くがもたなかったこともその一因だろう。また、いちいち、あれをこうしろとか、こつちをどうしろとか、言葉を使わないでも「Ⅱ」「式の方法でどうにか社会を維持してきたという実績が、沈黙への自信を深めている、とみることもできる。

わたしは、日本文化の改造などという大それたことに^{〔注3〕}気焰をあげたくはない。しかし、満員電車から降りるときには、「すみません、降りますよ」というひと言を、また、何かのサービスを受けたときには「ありがとう」というひと言を口にするという簡単な習慣が、一人でも多くの日本人の中に定着してほしいと思う。旗を立てて絶叫^{ききょう}するのも結構だが、ふだんの小さな会話を大事にしたいと思う。それだけで、ずいぶん身边は明るくなるにちがいないのである。

(加藤秀俊の文章を一部改変した)

〔注1〕 当方……自分の方。こちら。

〔注2〕 柳田国男……有名な日本文化の研究者。

〔注3〕 気焰をあげる……勢いさかんに意見を述べる。

問一 くくく線 A「おびただし」、B「おのずから」を、意味を変えずにそれぞれ五字程度の別の言葉で言いかえなさい。

問二 ——線①「その無表情、無言も程度問題だ」とありますが、「程度問題」とはどういうことですか。次のア、イの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 不愉快な満員電車に乗っているので、^{だれ}誰もが無表情・無言になってしまふのはわかるが、電車から降りる人に押されても黙って我慢^{まん}しているのはおかしいということ。

イ 不愉快な満員電車に乗っているので、人々が無表情になったり、無言になるのはわかるが、電車を降りる際に人を押しつけても黙ったままではいるのはおかしいということ。

ウ 不愉快な満員電車に乗っているので、皆^{みな}無表情・無言でいるのは当然だが、イワシのカン詰めのように押しつぶされそうになっても不平も言わずに我慢しているのはおかしいということ。

エ 不愉快な満員電車に乗っている時は誰でも無言になるので、電車を降りる際声をかけにくくなってしまふのは当然だが、人とぶつかっても無言でいるのはおかしいということ。

問三

a

、

d

に入る最も適当な語を、次のア、イ、ウ、エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア したがって

イ 要するに

ウ しかし

エ そのうえ

オ 一方では

カ 例えば

問四

——線②「モグラ人間」とはどのような人間ですか。四十字程度で説明しなさい。

問五 「Ⅰ」「Ⅱ」には四字熟語が入ります。次の語群から最も適当なものをそれぞれ一つずつ選び、漢字に直して答えなさい。

イキトウゴウ	イシンデンシン	イッシンイッタイ
シクハック	フゲンジッコウ	イッシンドウタイ

問六 ———線③「これもまた、どうにかならないか、とわたしは思う」について次の問いに答えなさい。

(1) 「これ」とはどのようなことを指していますか。四十字以内で答えなさい。

(2) このことを改善するには、筆者は、日本人に何が必要だと考えていますか。本文から抜き出して、七字で答えなさい。

問七 日本では、アメリカやヨーロッパとは違って事務的な会話になってしまふのは、どのような原因によると筆者は考えていますか。八十五字程度で答えなさい。

問八 この文章の題名として最もふさわしいものを次のア～カの中から選び、記号で答えなさい。

ア 伝統と改造	イ 日本人のマナー	ウ 沈黙の世界
エ 無言の力	オ 簡単な習慣	カ 日本文化への失望

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

二

どの桜ももう花満開というところだった。校門の横のも、運動場に沿ったのも、プールの入口にあるのも、桜という桜は、^(注) 明るい花をいっぱいにつけていた。いっせいにあかりをつけた雪洞が、学校をやわらかに照らしている……といったかつこうに見えた。見上げれば青空もやさしい春の色。校門から次つぎに入ってくる中学生のうち、^① 新生は一目でそれとわかるピカピカのいでたちで、横についている父親か母親のことを、^② けむたそうに見やりながら、講堂にむかっていた。父親つきが意外に多いのに、内心ほっとしながら、とうさんは、(入学式ちゅうもんは、昔も今も、なんでこないに似とんのやろか……) と思っていた。

四月九日。あかりの中学校入学式の日だった。やや緊張気味なのか、あかりの色白の顔が、むしろあお白い感じに見える。とうさんの横に立って、あかりは学校全体を見まわしていた。運動場も校舎もプールも、たしかに小学校の倍はありそうだった。あかりが通っていた小学校も古くからあるもので、校庭もゆったりと広くとってあったし、校舎のつくりにしても、第一、廊下の幅からして、近頃のせせこましいのとはちがっていた。けれどこんどの中学校は、更にゆったり建てであった。学区の三つの小学校の生徒が集まるのだから当然のことだったが、ながめていて気もちがよかった。いれものが倍になると、なんだか自分の体まで倍にふくれあがったような気がして、あかりは軽いためいきをついた。

耳ざとくその音をきいたとうさんが、

— なんか、中学生になって不安か？

と、たずねた。

— ううん。

あかりは首を横にふった。

② 武者いき、ちゅうところや。

「むしゃいき? なんや、それ?

とうさんが I 返しにきいた。

「よう武者ぶるいするなんて言わはるやろ。そのいきの方や。」

「武者いき……ねえ……」。

とうさんは苦笑しながら、あかりなりの緊張の仕方を思いやった。

一人っ子だった。小学三年の夏から、母さんヌキの暮しだった。とうさんの仕事の関係から、いろんな大人がしょっちゅう家に入出入りした。あかりは、ときにはお手伝いさんといっしょに、母さんがわりの II “もしなければならなかった。

背のびさせたつもりはなかったが、やはりいつのまにか、大人のことばづかいをおぼえ、大人みたいにふるまうことがあった。そのぶんだけ、おないどしの友だちとのつき合いに欠けるところがあった。あかりの誕生日の小パーティにしても、小さなころは同級生をたくさん招んだものだったが、六年生のときは、大人のお客の方が多くなっていた。子どもの方は二階に集まり、大人たちは下のとうさんの画室に集まった。あかりは上と下とを往復運動して“サービス”しなければならなかった……。

この四年のうちに、とうさんはあかりの肖像画を何枚か描いてきた。一枚毎に、しっかりした顔つきになるのが分かった。どこよりも、目がちがつてきていた。目つきが鋭くなるというのではない。大人の目つきになるのでもなかった。目に光があるともいうのだろうか。それはときには、とうさんの内心まで見通すようなつよい光だった。二人暮しになってから、とうさんはあかりには何一つかくしだてしないように努めたが、あかりの目に光が入ってからは、もう何一つかくしだてできない気がしていた。かといつてももちろん、とうさんにとって、そうしたあかりの目の光がうつとうしいわけではなかった。そうではなくて、ときには、まぶしく感じるのだった。それはちょうど冬の雲間から洩れる一筋の光に似ていた。あたりが暗い分だけ光は明るくつく感じられた。あたりが寒い分だけ、光が暖かく感じられるのだった……。

いま、とうさんの横に立つあかりの目は、まわりの中学生同様、新しく通う学校がいったいどんなところかを見てやろうとする、ふつうの好奇心の色に包まれただけのものだった。とうさんも、自分が入る中学校の校舎を初めて見たときのことを思いおこそうとした。できればそのときの目で——中学生の目で、いまのあかりの目になって、この学校をながめたくなくなった。

そのとき、講堂の方から、ハンドマイクを通したまのびした声が、とつぜん、

「新一年生のみなさんへは、こちらへはやく集合して下さい。」

と、がなりたてるのがきこえた。どうやら、世話役の新三年生らしかった。新入生の群れが、えさに集まる鯉になって、わらわらとそちらの方へ移動し始めた。あかりは目顔で、とうさんはそこに残るように言って、マイクの方へ歩きだした。見送るとうさんが、ふと目をそらせたたん、大小さまざまな中学生にまぎれこんだあかりの姿はどれなのか分からなくなってしまうていた。

(今江祥智『冬の光』より)

〈注1〉雪洞……木や竹のわくに紙を貼り、中に火をともし照明具。

〈注2〉まのびした声……間があきすぎて締めまりがない声。

〈注3〉わらわらと……ばらばらに取り乱れるようす。

〈注4〉目顔で……目つきで。

問一——線①「けむたそうに」とありますが、この言葉からわかる新入生の気持ちを三十字以内で答えなさい。

問二——線②「武者いき、ちゅうところや」とありますが、この言葉から「あかり」のどういう気持ちがわかりますか。

次のア、オの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 校舎や校庭を見た時の不安や緊張感から出たためいきだとして、自分の感じたことを父親にわかりやすく伝えようとする気持ち。

イ 中学へ入ったことへのあまりのうれしさから出たためいきだとして、自分のおくびような弱い心を奮い立たせようとする気持ち。

ウ 自分の将来に対する夢や希望から出たためいきだとして、娘のことを心配している父親を安心させようとする気持ち。エ わざと落ち込んでみせただけのためいきだとして、自分なりの緊張の仕方を父親にわかってもらおうとする気持ち。

オ これからのことを考えて勇み立って出たためいきだとして、自分の感じている不安や緊張を隠そうとする気持ち。

問三

「I 返し」という言葉が「人から聞いたことをそのまま言い返す」という意味になるように、I に当てはまる生き物の名前を答えなさい。

問四

II に当てはまる言葉を次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 対応 イ 接待 ウ 家事 エ 準備 オ 受付

問五

——線③「それはちょうど冬の雲間から、感じられるのだった……」とありますが、この部分について、次の問いに答えなさい。

(1) 「冬」「あたりが暗い」「あたりが寒い」などの表現は、「あかり」のどのような状況をたとえたものですか。五十字以内で答えなさい。

(2) 「一筋の光」「光は明るく強く感じられた」「光が暖かく感じられた」などの表現はどういうことをたとえたものですか。次のア～オの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 「あかり」が自分の心を察し、理解するようになったと思ひ、頼もしく感じられたこと。
 イ 「あかり」に人の心を読み取る能力が備わり、今後の人生にその能力を生かしていく希望を抱いたこと。
 ウ 「あかり」に隠しごとができないということ、今後に対して不安を感じていること。
 エ 「あかり」が大人になったような気がして、自分もしっかりしなくてはと決意を新たにしたこと。
 オ 「あかり」が人の心を理解するようになり、自分の役割が終わったと喜びと寂しさを感じていること。

問六 この文章から読み取ることができる「あかり」の人物像として当てはまるものを次のア～カの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 幼い イ わがまま ウ 社交的 エ 大人びている オ いいかげん カ 気配り上手

三

次の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。送りがなはひらがなで書くこと。

- ① 解説をつけて、本文をオギナウ。
- ② タダチニ出発しなさい。
- ③ 行動の立派な人物をウヤマウ。
- ④ 美容院をイトナム。
- ⑤ このバケツの容積をハカル必要がある。
- ⑥ ケワシイ表情をして考えこむ。

受 験 号

氏 名

◆ 字数制限がある問題は、「、」や「。」も一字と数えます。

A
B

問二	
問三	
a	
b	
c	
d	

[illegible]

I
II

[illegible]

問七

問八

二

[illegible]

問二

問三

問四

[illegible]

問六

①	
②	
③	
④	
⑤	
⑥	